

8) 白洲正子にみる古面の口腔観

Studies on the Old Mask of Shirasu Masako's concept

医の博物館 西巻明彦

Akihiko Nishimaki, *Museum of Medicine and Dentistry*

白洲正子は、1910年の生まれで随筆家で有名である。樺山伯爵家の次女として生を受け1913年学習院女子部幼稚園入園、1916年学習院女子部初等科入学、1924年学習院女子部初等科修了、同年アメリカに渡米しニュージャージー州のハトリッジ・スクールに入学、1928年卒業している。翌1929年には、白洲次郎と結婚している。白洲正子は、1998年88歳まで長命をまっとうするが、その生涯を貫ぬくものは現代文明に背を向けた日本古来からの自然とそれに対する祈りであった。『白洲正子自伝』によれば、「生まれつき持っていたものを、西国巡礼をすることにより、開眼したといえようか。或いは自分自身に目ざめたといい直してもよい。」と述べている。白洲正子が西国三十三カ所の巡礼にでたのは、1964年東京オリンピックの開かれた時期であり、日本が科学文明により大きく変貌をとげる時期でもあった。このため白洲正子の文章は、失なわれた日本を求めて時代のニーズにも答えていくことにもなる。

白洲正子の古面についての記述は、『古面の魅力十選』、『能面』などにみられる。元来白洲正子は、4歳の時靖国神社で梅若万三郎・六郎兄弟の「猩々」を観賞して能を愛好するようになり、6歳で、梅若六郎に入門、11歳の時には、毎日のように稽古場へ通いついには14歳で能の舞台で「土蜘蛛」を女性で初めて舞った。1943年梅若實の先祖伝来の能面などを神奈川県鶴川の白洲邸へ疎開させている。1960年50歳の時、能の免許皆伝をとるが、これ以降能を舞うことから急速に遠ざかり、むしろ執筆の方が増えていくことになる。『能面』には、「能面という、まず心に浮かぶのは岐阜県白鳥の長瀧白山神社に蔵されている古面である。鎌倉時代の作だから、厳密に言えば、まだ能面とは呼べない。能面の原型というべきだろう。「延命冠者」に似ているので、その名で呼ばれることもあり、時には「女」、時には「童子」と名

づける場合もある。狂言面の「乙」（おかめ）や、「猩々」にも似ているが、これに皺を彫り、鬚をつけ加えれば、そのまま「翁」の面にもなる。原型といったのはそういう意味で、あらゆる可能性を秘めた不思議な彫刻である。想うにこの作者は、名前なんかどうでもよくて、ただしっかりした面を彫ることしか念頭になかったに違いない。」と記している。白洲正子の古面に対する想いは、比較的単純化された美、しっかりした彫刻、それではげしい情熱に裏打ちされている古面を好む傾向があったのではないからと考えられる。口腔は、古面の中で下1/3を占め、顔の表情をあらわす重要な要素であるが、白洲正子の好む古面は、口唇や口腔、歯牙が解剖学的に忠実に再現されている古面が多いと考える。このことを指してしっかりした彫刻と記述しているのではないかと思われる。特に「舞楽面陵王」について、「中国北齊の蘭陵王は、あまりに美しい顔をしているため、兵士がみとれて働かないので、このような怪奇な面をつけて、戦いに臨んだという。頭上に龍を頂き、大きな眼窩の中に両眼を見開き、口は吊り顎になっていて、躍動するたびにゆれ動く仕掛けに作ってある。この面は、舞楽の最盛期の作で……中略……明るい満月のもと、かがり火に照らされて、金色にかがやく急テンポの乱舞いは、この世のものとも思われず、心身ともに陶醉したのであった。その時私は、王朝の魂にふれる思いがした。それはけっして今考えるような幽に優しいものではなく、実は烈しく、豊かな情熱に裏打ちされているということであった。」と記している。これは、奈良春日大社の舞楽で蘭陵王が舞われた時の描写であるが、眼は動眼といって眼が動く仕掛けとなっており、さらに吊顎により舞いの動きにより下顎が動く様子は、きわめて躍動感のあるものである。白洲正子は、能を自ら舞って免許皆伝を得ている立場にあり、その審美眼は確かなも

のであったと思われる。実際に、その能を舞う背景の風土性にまで言及しており、特に川と山の信仰に対しては、能との関連性を含めて奥が深い。文明との比較において、『白洲正子自伝』の中で、「近江の山の上から、こがね色の稲田の中を新幹線が颯爽と走りすぎるのを見て、優越感にひたっ

たものだ。お前さんはすぐ古くなるだろうが、こっちは千数百年を生きた巡礼をしている人だ、ざまあ見ろ、……」と記述している。このような感情をもつ白洲正子の古面に対する口腔観について考察を行った。